『ダーバヴィル家のテス』とヤヌスの神話（二）

安達秀夫

四　悲劇の構造としてのヤヌス

先に「第一局面」と「第二局面」をつなぐ〈仲介者〉としての、双面の門神ヤヌスの影を見たが、[1] その後のタルボットヘイズの場面とフリントコム＝アッシュの場面をつなぐものとしても、ヤヌスの影が、「大晦日（New Years's Eve）」（一六〇、一六四）[2] のテスとクレアの結婚式と、その直後の二人の別離において、さらにはっきりと見ることができる。その双面で門の前後を同時に見張るように、ヤヌスが「往く年」と「来る年」のあいだに立って両者を見張り、両者を仲介する神で、「一月」の語源にもなっていることは本稿序章の最後に掲げたとおりである（January は Janus にちなむ）。結婚直前のテスとクレアが小旅行の先でテスの過去を知っている男に出会ったのは「クリスマス・イヴ」（一六二）で、そのとき〈門神〉ヤヌスのエンブレムである「入口」や「ドア」や「敷居」への言及が少なからずあったことは先に本稿第三章で指摘したとおりだが、年が明けて数日後、テスがクレアと別れて一人で郷里へ帰って行くときは、途中で「門番」が登場する。

彼女は村へ行く街道に立っている通行税取り立て門のところに来た。門を押し開けてくれたのは、長年そこを守っていてテスをよく知っている老人ではなく、見知らぬ男だった。おそらく老人は、そうした交代が行われる元日（New Year's Day）にここを出発していたのだろう。（一九九－二〇〇）

これは要するに、十二月二十四日のクリスマス・イヴから、大晦日の結婚とその夜の告白を中心にして、数日後の別離までを〈門神〉が見張っている格好だが、ヤヌス自身はすでにそこを出発しているかのようである。今までもテスの旅路に同行して「テスをよく知っている老人」のヤヌスは、これからはじまるテスの再度の〈復活〉の旅に同行するために、門番の仕事は後任にまかせて「元日」という〈ヤヌスの月〉の最初の日にそこを出発していた、とも読めるからである。だから、この後任の新しい門番が、テスの一家はだいぶ前に没落した旧家であるとの噂を聞いていて、それを「ローマ人の頃に破産した」（二〇〇）と言っているのも、べつに違和感なく自然に聞こえてくるだろう。それはいかにも古代ローマの門神ヤヌスの後継者にふさわしい的確かつ示唆的な表現なので、なるほど『テス』を単純なリアリズム小説として読めば、この門番の言うことは時代錯誤とも聞こえるかもしれないが[3]、それはむしろ撞着語法的（オクシモロニック）に〈的確な時代錯誤〉とでもいうべきで、この「ローマ人」と「門番」と「元日」への言及が暗示しているのは、まさにローマの門神ヤヌスの姿そのものなのであり、ここはまたテスの物語をリアリスティックにというよりはエンブレマティカルに、もしくは構造的に、ヤヌスの神話のコンテクストにおいてとらえ直すように示唆しているところでもあるのである（注（4）を参照）。

かつてテスが、アレックのいる〈地獄〉のようなトラントリッジから、その後クレアのいる〈楽園〉のようなタルボットヘイズへ行ったときは、ちょうどクマエの巫女シビュラに導かれたアエネアスの冥界降りのように、あたかもヤヌスに導かれて冥界の地獄タルタロスから、つづいて冥界の楽園エリュシオンの野へと降って行くかのようだったが（本稿第二、三章参照）、今度のフリントコム＝アッシュへの旅は、まさに『テス』の最後で語り手が言及している、アイスキュロスの描いた縛られたプロメテウスと同様に、「神々の司」（三一四）のゼウスの「戯れ（sport）」（同）によってタルタロスへ落とされてゆくかのように描かれている。むろんその際にもヤヌスはテスを導く神として――というより、序章でも触れたように〈ゼウス＝ユピテル＝ヤヌス〉の同一性を指摘したJ・G・フレイザーの『金枝篇』を援用していえば「神々の司」そのものとして[4]――テスの旅路に同行し、その運命を司り、折りにふれて影のようにその姿を現す。それはまず、テスがこの「門」を通ったあと、両親のいる実家に着くところに現れる。すなわちその「なつかしいドア」（二〇〇）に向かい、庭の「裏木戸」（同）のそばの「戸口」（同）で母親に会い、「ドアの中に」（同）入り、そこでジョンとジョーンという一字違いの同名の、すこぶるヤヌス的な両親から、そこが自分の居場所ではないことを知らされる（二〇二、二〇三）、――ちょうどプロメテウスにとってカウカソスの山も自分の居場所ではなく、その後タルタロスにまで落とされることになっていたように。

この両親は、結婚に失敗して帰ってきたらしい娘を見ても、一人は「哀れむべき母親としての自分自身のために涙を流し」（二〇一）、もう一人は、飲み屋で常連の仲間に向って娘が「紳士」と結婚して家名再興が成ったとばかりにさんざん自慢していたので、今度は逆に彼らから向けられるにちがいない「冷笑的な眼差し」（二〇二）に堪えられないと嘆くばかりであるから、傷ついて帰ってきた娘をいたわるどころか、つまるところ見栄っぱりで我が身が可愛いだけの自己中心的な連中で――要するにこの二人は〈身勝手さ（セルフィッシュネス）〉という一つの体の上に〈ジョン〉と〈ジョーン〉という違った二つの顔が乗っている、双面一体のヤヌスと言っていいのである（この「身勝手」の語については注（10）を参照）。顔は違うが中身は一つというこの両親の名前が、ジョン（John）とジョーン（Joan）という一字違いの同名で（Joan は John の女性形）、同じ点もあれば違う点もあるというのも、二人のヤヌス性を表すものと考えられることは、先に第一章で指摘したとおりである。また今のテスにとって両親の許に帰ることは、いまだ〈テス・ダーバヴィル〉としてのアイデンティティを確立してはいないにしても、昔の〈テス・ダービフィールド〉のアイデンティティに逆戻りすることにほかならず、[5] 数日で両親の許を去り、働き場所を求めて転々として、最後にフリントコム＝アッシュ（Flintcomb-Ash）の農場にたどりつく。ここはその名のとおり堅い「火打ち石（フリント）」（二二三）が散在する、ローマの地下墓所（カタコム）もかくやと想わせる荒寥寂莫とした痩せ地で、その名も冥界の王プルトにちなんで語り手が「プルトの主人（Plutonic master）」（二五六）と呼ぶ巨大な脱穀機のそばには一本の「とねりこ（アッシュ）」（二五五）の木が生えている、まさしく縛られたプロメテウスが落とされた、プルトが「主人」として支配する、死者たちの住む地下の冥界の地獄タルタロスである。[6] しかも季節は冬、常夏の〈楽園／エリュシオンの野〉もしくは〈天国〉のようだったタルボットヘイズから、一転してこの寒風吹きすさぶ荒寥としたフリントコム＝アッシュに落ちてきて、翌春の「旧暦の告知節」までここで働かなければならないという「契約」で縛られたテスは[7]（二二三、二五〇）、縛られたプロメテウスのように動くに動けず、荒地にわずかに生える蕪を熊手で掘り起こしたりする重労働に「奴隷」（二二五）のように黙々と従事する。

テスには、こうした農場での過酷な重労働もさることながら、それ以上にクレアの〈不在〉がこたえているが（より正確にはクレアの「自身（self）」の〈不在〉こそがテスの〈地獄〉であったと言うべきだが［後述］）、またそうなる運命をクレアがくだした「罰」（一九九、二六四）と受けとめて耐えているが、その罰は、くだした当のクレアの〈身勝手さ（セルフィッシュネス）〉を考えれば、やはりあの残酷で横暴な「神々の司」のゼウスが、プロメテウスを鎖で縛り上げて毎日大鷲にその肝臓を喰らわせたあげくタルタロスに落とした過重な罰が連想されよう。そしてのちに、ゼウスが将来「神々の司」の地位を奪われるかもしれないある「秘密」を教えてもらった代わりに、

プロメテウスを解放すべくヘラクレスを送ったように（注（22）を参照）、農場との契約で〈縛られたテス〉を、そのタルタロス落としの「罰」から解放すべく一人の男が「門のそば」（二五七）を通ってやってくる。それがアレック・ダーバヴィルである。――アレック（Alec）、つまりクレア（Clare）とは一字違いのアナグラムの名前を持つこの男が、その性格や生き方やテスとの関係において、クレアとは正反対の面を持ちながら、〈身勝手（セルフィッシュ）〉なエゴイストとして中身はクレアと一体であることは、すでに第一章以降で繰り返し指摘してきたとおりである。一字違いの同名のテスの両親と同様に、〈身勝手さ〉という一つの体の上に、〈クレア〉と〈アレック〉という逆を向いた二つの顔が乗っている、そういう双面一体のヤヌスとして、この二人を一人の（もしくは一柱の）双面神〈クレア＝アレック〉と称すべきものであることも、すでに繰り返し触れてきたとおりである。そしてこの〈クレア＝アレック〉というヤヌスが、テスを悲劇へと導くことになるわけで、それはテスが初めてマーロットの村の「小門」（七）を通ってその悲劇の舞台に登場し、やはり「門」（九）によりかかっている旅行中のクレアに出会ったときから始まっていたわけだが、その舞台がフリントコム＝アッシュに移ってから後は、ヤヌスはいよいよはっきりと「戯れ」としてテスを翻弄する〈悲劇の構造〉そのものに姿を変えて登場する、と言っていいだろう。それというのも、クレアがブラジルに発って退場し、入れ替わりに、それまで一時退場していたアレックが「門のそば」を通って再登場してから後は、この悲劇は、具体的にはテスと、〈不在〉のクレアと〈顕在〉するアレックとの、まさに逆を向いた双面の〈クレア＝アレック〉との関係を通じて、言い換えれば〈ヤヌスの構造〉にしたがって展開されてゆくことになるからである。以下のように――

双面の〈クレア＝アレック〉の、アレックとは正反対の面を持つクレアが、最初に牧歌的で〈楽園〉のようなマーロットでテスに出会うと、アレックは〈地獄〉のようなトラントリッジでテスに出会い、その後クレアがもう一つの〈楽園〉もしくは〈天国〉のタルボットヘイズでテスに再会すれば、アレックはもう一つの〈地獄〉フリントコム＝アッシュで再会し、クレアが罰をくだせばアレックはそれを解放し、クレアが退場すればアレックは登場し、クレアがテスを棄てたまま放置すればアレックは彼女を自分のものにする。――常に逆方向を向いた双面神たる所以であり、[8] アレックの〈顕在〉はクレアの〈不在〉の関数になっている。またアレック自身は、クレアと同様に、双面の〈クレア＝アレック〉として、すなわち〈天使〉と〈悪魔〉の二つの面に分裂したアイデンティティの持ち主（言い換えれば「二重人格者」[9]）であるから、〈悪魔〉としてテスを誘惑してレイプすることもあれば、〈天使〉としてテスの窮状を救うこともある。むろんその点はクレアも同じで、〈天使〉としてテスを優しく愛することもあれば、〈悪魔〉としてテスを

冷酷に棄てたまま放置することもある。一方、テスにとってのクレアとアレックは、愛情と憎悪、尊敬と軽蔑、聖性と獣性、受容と拒絶、快と不快、といった対立するヤヌスの〈二重性〉をになう存在であるから、テスがどんな苦境に置かれても、そしてアレックがどれほど優しく救いの手を差し伸べてくれても、テスがアレックに感じるのは、憎悪と軽蔑と獣性と拒絶と不快といった否定的な面ばかりである。こうしたテスの双方への態度は一貫しており、たとえばクレアがテスと別れた直後、ブラジル行きにイズ・ヒュエットを誘ったことが分かったあとも、動揺はあったもののクレアへの愛情はまったく変わらないし、また一方、テスの父親の死後、家族が借家を追い出されて文字どおり路頭に迷い、テスがアレックの援助を受け入れてふたたびその愛人になったあとも、アレックへの憎悪は変わらない。なるほどこのときは、アレックを拒絶しきれずにその獣性の犠牲になったわけだが、それでも憎悪と軽蔑と不快に変わりはない。テスのこうしたアレックへの一貫した激しい嫌悪は、その〈悪魔〉との合体が、すなわち〈偽のダーバヴィル〉（二八、六四、一〇〇）との合体が、〈偽のテス・ダーバヴィル〉というアイデンティティの崩壊・喪失・死を意味するからにほかならない。逆にテスがクレアを愛しつづけるのは、テスのアイデンティティの回復・復活・確立は〈天使〉のエンジェル・クレアとの――クレアの「自身（セルフ）」[10]との合体によらねばならないからで、だからこそテスにはそのクレアの「自身（セルフ）」の〈不在〉がこたえ、〈帰還〉を願うのである。

> わたしの願いは天にも地にもただひとつ、あなたに、わたしの大事なあなたに会いたいということだけ！　帰って来て――帰って来て、そして、わたしを脅かしているものから、わたしを救ってください！　（二六五―六六）

このブラジルにいるクレアへの手紙の「わたしを脅かすもの」とは、アレックが〈顕在〉し、つきまとい、誘惑し、〈偽のダーバヴィル〉との合体を執拗にせまること、すなわちテスのアイデンティティを〈死〉に至らしめる恐怖であり、それがクレアの〈不在〉と相関関係になっている。テスはこの手紙の前の方で、クレアがすぐに帰ってきてくれないと「死ななければならない」（二六四）と訴えているが、アレックとの合体がアイデンティティの〈死〉を意味することは、のちに「青鷺荘」で「遅すぎた」（注（11）参照）再会をはたした際のクレアの目に映ったテスの姿が「流れに浮かぶ死体のようだった」（二九九）というところにつながっている。アレックの愛人となり、〈偽のダーバヴィル〉と合体し、〈偽のテス・ダーバヴィル〉というアイデンティティを喪失した「死体」となって、

テスは流れに身を任せてただようことになるのである。こうしたテスがふたたびよみがえるには、あくまでも〈天使＝クレア〉によらねばならないが、しかしその肝心のクレアは、ブラジルで辛酸をなめたり反省したりして多少は変わったものの、〈エンジェル・クレア〉として十全なアイデンティティを確立しているとは到底いえない状態で帰ってくる。クレアが双面の〈クレア＝アレック〉であることをやめ、単面の〈エンジェル・クレア〉となり、テスをアイデンティティの〈死〉から救出するには、その〈アレック〉の面を抹殺しなければならないが、当人にそれができなければ、テスがやるほかはない。――悲劇はすでにヤヌスの「戯れ」として構造化されているのであり、テスのアレック殺害は、この〈ヤヌスの構造〉にしたがって予定されていた（もしくは運命づけられた）行為にほかならず、あとはクレアの「遅すぎる」帰還を待つばかりなのである。

＊

クレアはブラジルで相当の苦労をし、「精神的に十歳以上歳をとった」（二六七）が、だからといってそれだけ成長したわけではない。目立った成長は、「今や道徳の古い価値基準を疑いはじめ」（同）、テスが結婚したとき処女でなかったことへのこだわりがなくなったことぐらいである（二六八）。しかもそれは、現地で知り合ったある「コスモポリタンな心」（同）を持った男のアドヴァイスをいれてクレアがその頑なな心を開いたので、みずからの内発的な反省によって掴みとったものではない。自分の〈不在〉がどれほどテスを苦しめたかについての思いやりもなければ、いわんや自分の〈身勝手さ（セルフィッシュネス）〉〈エゴイズム〉への反省はまったくない。クレアがテスの許へ帰ろうとするのは、簡単にいえばその処女性へのこだわりがなくなったのと、旧家の末裔としてのテスの顔の「威厳のきらめき」（二六九）を思い出したからで、この点もクレアは、双面の片割れのアレックの場合と相似形をなしている。アレックは最初にテスを失ってからは、前非を悔いて改心し、牧師であるクレアの父の教えを受けて説教師になり、それまでの自堕落な生活を改めて多少は道徳的になったようだが、テスと再会してその美しい顔を見ると、またぞろ昔を思い出しては執拗にテスを追い求め、自分の〈顕在〉がどれほどテスを苦しめるかについての思いやりもなければ、いわんや自分の〈身勝手さ〉〈エゴイズム〉への反省はまったくない。――要するにこの二人は依然として〈クレア＝アレック〉なので、その双面一体性に何ら変わりはないのである。

この〈一体性〉の部分、すなわち〈身勝手さ〉〈エゴイズム〉は、帰国してからのクレアについても、さまざまな形で見ることができる。それはたとえば、細かなところでは、留守中自宅に着いていたテスの手紙を読んで、「・・・自分に対する最近のもっと手厳しい意見などもはや信じないで」（二九二）云々とあるように、〈自分に都合の悪いことは信じない〉ところにも見られるが、とく

にテスの〈名前〉について錯覚しているところは、語り手は実に興味深い、手の込んだ語り方をしている。クレアはテスを探しにまずフリントコム＝アッシュに出かけて行き、そこでは「テス」の名前では知られていたものの「クレア夫人」という名前は誰も知らなかったことに「意気消沈」したというのだが（二九三）、テスを放置してさんざん苦しめておきながらなお「クレア夫人」を名乗ることを期待していた能天気ぶりは、後述するようにもう一度繰り返されるが、そうした〈身勝手さ〉への無反省は、クレアの鈍感さ、愚かさ、おめでたさの表れとして、このあとシェイクスピアを援用しながら次のように〈間接的に〉指摘される。――クレアはその後テスの郷里のマーロットへ探しに行き、テスの一家が追い出されたあとの家に住んでいる新しい住人に会うが、その一家について語り手は、「自分自身の営みには多大な関心を払い」、「自分自身の関心事を最重要に考えながら菜園の小道を歩き回る」（二九四）人々であると言い、こうした連中の歴史などは「白痴の語る物語」（同）にすぎず、さらには「先住者の名前の記憶すら薄れかけている珍しい愚か者ども」（同）と口をきわめて罵っている。――この人々はここでたった一度言及されているだけで、後にも先にもここしか出場はないのだが、またそうであればこそ、この「白痴の語る物語」というマクベスのあまりにも有名な独白（五幕五場二六―二七行）を引用しながらの罵倒からは、その直前にある「自分の［出場の］ときだけ、舞台の上で気取って歩いたり苛立ったりする、哀れな役者、歩き回る影」という一節がおのずと浮かんでくるだろう（同二四―二五行）。またそうするとこの「歩き回る影」は、ブラジルから、病み上がりのやつれ果てた、母親も嘆くほど哀れな姿で帰国したクレアの、日没の真横からの「光を背にした姿」（二八九）――つまり〈影絵〉としてこの悲劇の舞台に再登場して、すぐにテスを探しにフリントコム＝アッシュやマーロットを「歩き回る」、「哀れな役者」としての姿と重なり合って見えてくるだろう。というよりこの『マクベス』への言及は、その一度しか出場のない新しい住人に仮託して〈間接的に〉語られたクレアの、だれも知らない「クレア夫人」の名前を無意味に連呼する、テスの「名前の記憶すら薄れかけた珍しい愚か者」ぶりと、その「自分自身の関心事を最重要に考える」エゴイズム、身勝手さを、「響きと怒りで満ちあふれた、何の意味もない、白痴の語る物語」として強調するところに力点が置かれていたと言っていいのである。（タルボットヘイズで乳搾りの娘たちがクレアについて、「自分自身の思いにとらわれすぎて女の子たちにはまるで気がつかない」（八八）と言っていた、〈他者〉としての「女の子たち」が見えないクレアのエゴイスティックな面を衝いた、先に本稿第一章でも引いた箇所を、ここでもう一度想起してもいいだろう。）

事実、このテスの「名前」についての錯覚はさらに、テスのアイデンティティがまるで分かってないクレアの愚かさ、鈍感さ、お

めでたさ、能天気ぶり、さらには「白痴」ぶりの喩として、このあともつづくのである。テスの母親からテスがサンドボーンに住んでいることを聞きだしたクレアは、そこの郵便局でまたもや、前述のように「クレア夫人」の住所をたずね、だれも知らず、「じゃあミス・ダービフィールドは？」と聞いても分からず、「ダービフィールドという名前は知らないが、青鷺荘にダーバヴィルという人がいますよ」と言われてようやく住所を知る（二九七）。このあと青鷺荘をたずね、「テリーザ・ダーバヴィル、あるいはダービフィールドは在宅ですか」とたずね、「ダーバヴィル夫人ですか」と聞き返されて「そうです」と答える（同）。今のテスのありよう（アイデンティティ）は、先にも見たように〈偽のダーバヴィル〉と合体した〈偽のテス・ダーバヴィル〉であるから、クレアの言ったテスの〈名前〉はことごとく間違っている。（いま「そうです」と答えた名前も、〈真のダーバヴィル夫人〉と間違えているのだし、「テリーザ（Teresa）」は本名のようではあるがテス自身はまったく使ってないので主体的なアイデンティティを表すものとは言いがたい。）クレアは〈自分に都合の悪いことは信じない〉以上、こういうおめでたい錯覚をするわけだが、しかしすぐにそのツケは回ってくる。テスの今のありようを知らされ、「遅すぎた」（二九八）とテスに言われて、「ああ――ぼくの過失だ！」（二九九）と嘆く羽目になる。（経済的に縛られて憎悪するアレックの愛人になっていることを、レイプされつづけている状態とみなせば、この「青鷺荘」でのエンジェルに対するテスの「遅すぎた」という台詞は、先に序章でも指摘したように、レイプされたルクレティア／ルークリースがようやく戦地のアルデア（この地名は「青鷺」の意）から帰還してきた夫に言った「遅すぎた」というシェイクスピアによる台詞といよいよ響き合って聞こえてくるだろう。[11]）

こういうクレアでも、青鷺荘を訪れて「ドア」のところで名前を聞かれたとき、「エンジェルです」（二九七）と答えている。これは一面では、実は〈クレア＝アレック〉にほかならないクレアが自分のアイデンティティにも無知（イノセント）なことを表わしてもいるが、もう一面では、これはテスにとって、遅すぎはしたものの、待ちに待った〈天使（エンジェル）〉の帰還を表わすものでもある。それによってテスがよみがえることができる〈天使〉がついに帰ってきたのである。先にアレックがフリントコム＝アッシュに現れたときは〈門神〉らしく「門のそば」を通って来たが、同様にクレアも「ドア」を通って青鷺荘の中へ入って来るわけだが、また二人は常に反対方向を向いたヤヌスであるからここでも顔を合わせることはありえないが（注（8）参照）、同様にテスにとってクレアとアレックの〈共存〉もありえない。常に一方の〈顕在〉は他方の〈不在〉の関数になっていることは、先に指摘したとおりである。したがって〈天使〉が帰ってきた以上〈悪魔〉は消えなければならず、しかも〈天使＝クレア〉が依然として双面の〈クレア＝アレック〉である以上、

テスは、その〈不在〉であるべき〈悪魔＝アレック〉を抹殺しなければならない。テスが「流れに浮かぶ死体」からよみがえるには、アレックを殺さなければならず、クレアの「遅すぎた」帰還によってようやくその機会が訪れ、殺人はその直後に実行されるのである。

このように「死体」からよみがえるためにアレックを殺害したテスは、だから、その後はじつに生き生きとしている。この殺人が〈ヤヌスの構造〉にしたがった行為であるためだろうが、テスには殺人を犯した罪の意識はほとんどないどころか、[12]「ついに満足」し、「幸せで涙をながして」（三〇四）いる。テスはエンジェルの〈帰還〉と〈顕在〉と、その「自身（セルフ）」との合体によってようやく「流れに浮かぶ死体」からよみがえり、復活し、はれて〈エンジェル・クレア夫人〉となり、さらに〈真のテス・ダーバヴィル〉になろうとしていたのである。一方クレアも、テスのアレック殺害を聞いて、「なに――体を（bodily）？　彼は死んだの？」（三〇四）と、テスの「肉体的な意味における・・・夫」（二八二）であると同時に〈双面一体〉の自分の〈片面〉の死を確認し、もはや双面の〈クレア＝アレック〉ではなく単面の〈エンジェル・クレア〉となり、「彼女にとって、彼は昔どおりに、人格的にも精神的にも（personally and mentally）まったく完全そのもの」（三〇四、傍点筆者）に回復する。テスがその殺人を、「あなたのためにも、わたしのためにも、そうしなければならなかった」（三〇三）と言っているのも、二人がそれぞれのアイデンティティを回復するためには、まずアレックの面を抹殺しなければならなかった事情を表している。

しかしこのクレアの〈回復〉は、今もあったようにあくまでも「彼女にとって」の回復で、クレア自身は、テスのアレック殺害という〈他力〉によって回復したのであり、自力で掴みとったわけではない。またクレアは、双面の〈クレア＝アレック〉のまま片面を殺されたわけで、つまり〈クレア〉と〈アレック〉が未分化で〈一体〉のまま片面を「肉体的に（bodily）」殺されたわけであるから、その点でクレアは、半分死んだ状態に陥ってもいるのである。それはちょうどテスが、クレアと結婚して「二つの自身が一つに（two selves together）」（一六〇）なった直後、別離のためクレアの「自身（セルフ）」を失って、テスが文字どおり「半ば死んだ（half-dead）」（一九九）状態に陥ったのと同じである。〈クレア＝アレック〉のアレックを刺し貫いたナイフの切っ先は〈一体〉の部分を通してクレアにまで達して、クレアを「半ば死んだ」状態にしていた、とも言えるだろう。だから、アレックが死んだあとのクレアは、片面を失ったヤヌスとして生彩を欠き、その影はきわめて薄い。自力で〈クレア〉を取り戻して溌剌としているテスとは違って、半死状態のクレアは、このあとはただテスの最終的なアイデンティティの〈復活〉を支えるいわば黒子の役割を果た

すのが精々である。そしてその役割として、クレアはテスをストーンヘンジという異教徒の神殿跡に導き、最終的な〈テス・ダーバヴィル〉としてのアイデンティティの確立に協力することになる。この「すべてが扉と柱」（三一〇）という、ヤヌスの神殿とも見まごうほどの形容の、異教徒の神殿跡で、テスは「いま故郷に帰ってきた」（三一一）と言いながら石の祭壇の上に横たわり、先祖と一体化して安息の眠りに落ちる。[13] 異教徒（ペイガン）の神殿跡で、サー・ペイガン・ダーバヴィルの末裔のテスが初めて〈真のテス・ダーバヴィル〉としてのアイデンティティを確認するのである。

そしてこのあとテスは、今度はクレアのアイデンティティの回復・復活に協力することになる、と言っていいだろう。「いま故郷に帰ってきた」と言ってみずからのアイデンティティを確認した直後、テスがクレアにやや唐突に、自分が処刑されたあと妹のライザ・ルーと結婚してほしいとすすめているのは、おそらくその意味である。この「とても善良で、素朴で、清純で」（三一一）、テスの「悪いところは持たず、一番いいところを全部持っている」（同）という妹をクレアと結婚させたがるのは、テスが言うように、三人が死んだあと「霊（spirits）」となって妹とクレアを「喜んで分け合える」からでもあるだろうし（同）、またそうすれば「死もわたしたちを引き裂くことはないように思える」（同）からでもあるだろうが、まずその前にクレアには、その「半ば死んだ」状態から立ち直ってもらわなければならない。テスはこのすぐあとで、クレアに、死んだ後も会えるかと聞いているが、それは今も見たように「霊（スピリット）」となってクレアと会って互いの「自身（セルフ）」を共有し合いたいためだが、そのためにもクレアの「自身（セルフ）」にはその〈死〉から〈復活〉してもらわなければならないのである。ちょうどテスがエンジェルのおかげでよみがえり――つまりクレアの「自身（セルフ）」との合体によってそのアイデンティティの〈死〉からの〈復活〉を果たしたように、今度はクレアの〈復活〉を――〈クレア＝アレック〉のまま片面を殺されて半死状態に陥りながらも、これからも生きてゆかねばならないクレアには〈生気（スピリット）の復活〉をしてもらわなければならないが、テスが処刑されてその合体すべき「自身（セルフ）」を失ってしまうとすれば、クレアにはその〈身代わり〉が必要になってくる。妹との結婚をすすめるとき、テスがクレアに「あなたの自身のために（for your own self）」、ライザ・ルーを「鍛え、教え、育て」てほしいと言っているのも（三一一）、この身代わりの〈他者〉を通じてみずからの「自身（セルフ）」を鍛え、教え、育ててほしいということだろう。

このライザ・ルーとの結婚をすすめるテスの姿を、先に本稿序章でも触れた〈楽園喪失譚〉のコンテクストにおいてみることもできるだろう。すなわち、第一章でも指摘したように、神を失って自我に目覚めた〈近代人〉としてのテスは、〈身勝手（セルフィッシュ）〉で自己中心

的な〈クレア＝アレック〉の不寛容やレイプによるアイデンティティの分裂に苦しみながら、その「モダニズムの苦悶」（九八）を経験することで「知恵の木の実」を食べ、目を開いて「自身（セルフ）」を知り、自己のアイデンティティを確立するのであるから、それは〈近代のイヴ〉としてのテスが、いまだに無知（イノセント）なままの〈近代のアダム〉としてのクレアに「知恵の木の実」を与えようとしている姿であって（「創世記」三・六）、してみると〈ライザ・ルー〉そのものが「知恵の木の実」の化身ということになるだろう（注（18）参照）。それによって目を開かせ、善悪を、というよりクレアの場合は〈他者〉との関わりを通じて「自身（セルフ）」を知り、自己のアイデンティティを確立し、いわゆる〈第二のアダム〉のイエス・キリストのように〈霊（スピリット）／生気の復活〉をしてほしいとテスは願っていた、とも読めるからである（イエスの「霊」の復活については次章を参照）。またそうすれば、最終章でテスの処刑を確認に行ったクレアがライザ・ルーを伴っていたことは、クレアがテスのすすめた知恵の木の実を〈食べた〉ことを表すだろうし、またそのライザ・ルーという〈身代わり〉を通じてテスは「二つの自身（セルヴズ）」の永遠の合体と、さらには〈救済〉を願ったのだろう。先に本稿序章で、『テス』の最後のアイスキュロスへの言及から、受苦しつづけるテスの姿がプロメテウスの姿に重ね合わされている様を見たが、また本章ではテスがプロメテウスのように冥界の地獄タルタロス／フリントコム＝アッシュに落ちてゆく様を見たが、そのプロメテウスにとって〈身代わり〉が〈救済〉を表していたように、テスの場合もそこに〈救済〉を読むことができるからである。

五　復讐の政治学と魂の救済

先にルクレティア／ルークリースの凌辱とそれに対する復讐が、ローマが王制から共和制に変わる政治的な事件につながったことに触れたが（本稿序章参照）、テスと〈クレア＝アレック〉との性を媒介とした関係も、男と女の支配・被支配の関係として、さらにその被支配者の支配者に対する復讐という形に変奏されて展開されているので、それも〈政治〉の問題としてとらえることができる。それにはまず〈命名〉の問題から見てゆくのがいいだろう。

名づけること、あるいは命名が、相手に対する一種の権力の行使であることはよく知られている。たとえばアダムが、目の前に連れてこられた動物たちすべてに「名前」をつけているのも、そうした動物に対する人間の「支配権・統治権（dominion）」を表すものだった（「創世記」一・二八）。とくに命名の対象が生まれたばかりの赤ん坊である場合は、赤ん坊には言葉で明確に自分の意志を伝えることができないために、名づける側は一方的かつ絶対的な権力者・支配者の相貌を帯びることになる。それはたとえば、テスが

牧師に代わって、生まれて間もなく死にそうになった子供にみずから洗礼をほどこすところに見られる。

「ソロー、父と子と精霊の御名によりて、われ汝に洗礼をほどこす。」（七四）

このようにテスは厳かに、死の床に横たわるわが子に対して、「悲しみ」「苦しみ」の意の「ソロー（Sorrow）」という洗礼名をつけているが、この命名の儀式を執り行う際のテスには「ほとんど王侯貴族のような威厳」（七四）があり、さらにテスを「ほとんど神のよう（almost apotheosized）」（同）に見せ、居並ぶ妹弟たちは姉のテスを「いよいよ畏敬の念をもって見上げた」（七五）とある。――〈命名〉が絶対的な権力行使の一形態であることをよく表しているところだが、そして『テス』ではその〈政治〉の問題は、男と女の〈支配〉と〈被支配〉の関係に、さらには暴力的に女を支配する〈レイプ〉とそれに対する〈復讐〉という形に変奏されてゆくのだが、それも最初は〈クレア＝アレック〉のテスに対するさまざまな〈命名〉からはじまっている。

「さて、人［アダム］はその妻の名をエバと名づけた」（「創世記」三・二〇）とあるように、クレアもアレックも「支配者」らしく好き勝手にテスに名前をつける。アレックは初めてテスに会ったときから「美人」の意の‘my Beauty,’‘my pretty girl’とか、苗字が同じため「冗談で従妹（いとこ）と呼んだり」（四六）していたが（この「従妹（Coz）」の呼称は繰り返し使っている）、アレックの〈ダーバヴィル〉は、成金の父親が貴族の名前を買って勝手に名乗っているだけの「偽物」（二八、一〇〇）であるから、その「従妹」とは、当然のことながらテスとの関係を正しく表すものではなく、したがってそのアレックの〈従妹のテス・ダーバヴィル〉という名前は、テスのアイデンティティを正しく表すものではない。のちにアレックはテスに結婚を申し込み（二四七）、すでにクレアと結婚しているので無理だと分かると〈愛人のテス・ダーバヴィル〉にするが、これも〈偽のダーバヴィル〉との合体であるから、〈偽のテス・ダーバヴィル〉という偽のアイデンティティを表すものであることは前章で指摘したとおりである。一方クレアはテスを、これも先に（本稿第一章で）触れたように「半分からかうようにアルテミスとかデメテルとかその他の妙な名前で呼んだ」（一〇三）が、テスはそれが気に入らず、「テスと呼んでください」（同）と抗議している。テスは一方的かつ恣意的な〈命名〉によるアイデンティティの支配を拒否しているわけだが、この点は、テスがダーバヴィル家の末裔であることを知ったときクレアが、これからは正しく「ダーバヴィル」と名乗るべきだと言ったのに対して、「前の方がいい、それが一番いい」（一四八）と言って拒否しているところと同じで

ある。このときのテスは、まだ〈テス・ダーバヴィル〉としてのアイデンティティを確立する前だったので、名前も前の〈テス・ダービフィールド〉の方がよかったのである。このように〈命名〉は、一方的で恣意的なアイデンティティの支配に通じるもので、この〈支配〉がさらに男による女の〈性の支配〉になるとき悲劇は生まれるのだが、この「支配したがる欲望」もまたヤヌスのエンブレムの一つであることは、本稿序章の最後に掲げたとおりである。

この〈性の支配〉による悲劇は、支配される女の「悲しみ・苦しみ」の表現として、テスがレイプの結果生まれた子供に命名した「ソロー」にすでに現れていたわけだが、この名前の由来は、「『創世記』の中のある句」からテスが思いついたものと語り手は言っている（七四）。その出典箇所については複数の解釈があるようだが、[14] おそらくそこは、当時最もひろく使われていたに違いない欽定訳聖書（老クレア師が読んでいたのもそれ［二〇六―二〇七］）の「創世記」の中で、男が女を「支配」し、女は「苦しみ（sorrow）」のなかで子供を産むことが述べられている次のくだりだろう。

つぎに［神は］女に言われた。
「わたしはあなたの産みの苦しみ（sorrow）を大いに増す。
あなたは苦しみ（sorrow）のなかで子を産む。
それでもなお、あなたは夫を慕い、
彼はあなたを支配（rule over）するだろう。」（第三章一六節［訳は基本的に口語訳によったが、一部欽定訳によって改めた。］）

ここは禁断の木の実を食べたアダムとイヴが神の罰を受けているところで、欽定訳の「創世記」で初めて‘sorrow’の語が出てくるところである。（他に欽定訳の「創世記」で‘sorrow’が出てくるのは四箇所あるが、どこも『テス』との関係は見出しがたい（注（14）参照）。このソローという命名には、だから、アレックという「夫」ならぬ情人によって暴力的に性を「支配」されて子どもを産むテスの「苦しみ」と、その子を葬らねばならない「悲しみ」とがこめられているのだが、このアレックとの性を媒介した暴力的な支配・被支配の関係は、のちにテスのアレック殺害という〈復讐〉によって決着が図られることになる。しかしそこに至るまでの過程でも、この「創世記」に記された男と女の支配・被支配の関係は、双面の〈クレア＝アレック〉とテスとの関係において、

すなわちヤヌスの神話のコンテクストにおいてとらえ直すと、さまざまな形で見ることができる。それはまず初めに、クレアとアレックが、パウロ主義を奉ずる〈父〉クレア師の〈双子〉の兄弟であるかのように、そのパウロの教え（特にその女性観）がよく二人に伝えられているところに見られるだろう。

先にも触れたようにエンジェル・クレアは老クレア師の実の息子で、将来聖職に就くことを望まれながらそれを拒否し、農業経営者として身を立てようとするものの、テスとのことが問題になれば時々父のもとへ帰還している。一方アレックは、一度はクレア師にその不品行をとがめられ、逆に侮辱してクレア師を拒否しているが、テスに去られてのちは悔い改めてクレア師に帰依して説教師になっている。この双面の〈クレア＝アレック〉は、クレア師という〈父〉との関係では、あたかも〈双子〉の兄弟のように、同じような離反と親和のパターンを繰り返すのだが、むろんこれも〈双子〉をそのエンブレムの一つとするヤヌスの双面一体性を表わすものだろう。そしてこの〈父〉の奉ずるパウロの教えが、その〈双子〉の息子たちに、肉体的（クレアの場合）かつ精神的（アレックの場合）に伝えられるのだが、アレックの場合はとくに、その突然の回心自体がすでにパウロ的であるだろう。それまで自堕落な生活をしていたアレックが、あるとき急に屋敷を処分して「アフリカ伝道に身を捧げようと思ってるんだ」（二四七）と言い出すあたりは、ダマスコへの途中で、それまでの苛烈なキリスト教徒迫害者から突然回心してその後は異邦人へのキリスト教伝道に生涯を捧げたパウロを彷彿とさせるからである。とはいえ「劣等な男」（二四三）とされているアレックは、テスに再会するとすぐにまたテスへの欲望を再燃させてあっさり説教師をやめてしまうところが、パウロとは決定的に違っているが、しかしその〈女性観〉に関しては、アレックにもクレアにも、〈父〉を通じてパウロの教えがきちんと伝えられ、とくにアレックは生涯その教えを棄てることはなかったようである。

周知のようにパウロは、新約聖書に多くの手紙を残しているが、その〈女性観〉については、女を〈支配〉の対象とみなしていたことはつとに知られているとおりで、その限りでは、今ふうにいえば〈男性優位主義〉に貫かれていたというほかはない。そのあたりを手紙から抜き出してみると――

すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神である。・・・祈りをしたり預言をしたりする時、かしらに物をかけない女は、そのかしらをはずかしめる者である。・・・男は、神のかたちであり栄光（グローリー）であるから、

かしらに物をかぶるべきではない。［しかし］女は、男の光栄（グローリー）である。なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たのだからである。また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのである。それだから、女は、かしらに権威のしるしをかぶるべきである。それは天使（エンジェルズ）たちのためでもある。[15]

（「コリント人への第一の手紙」一一・三―一〇、一部欽定訳によって改めた。）

・・・婦人たちは教会では黙っていなければならない。彼らは語ることが許されていない。だから、律法も命じているように、服従すべきである。もし何か学びたいことがあれば、家で自分の夫に尋ねるがよい。（同一四・三四―三五）

妻たる者よ。主に仕えるように自分の夫に仕えなさい。・・・夫は妻のかしらである。そして教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである。（「エペソ人への手紙」五・二二―二四）

妻たる者よ、夫に仕えなさい。それが、主にある者にふさわしいことである。（「コロサイ人への手紙」三・一八）

女は静かにしていて、万事につけ従順に教えを学ぶがよい。女が教えたり、男の上に立ったりすることを、わたしは許さない。むしろ、静かにしているべきである。なぜなら、アダムがさきに造られ、それからエバが造られたからである。またアダムは惑わされなかったが、女は惑わされて、あやまちを犯した。しかし、女が慎み深く、信仰と愛と清さとを持ち続けるなら、子を産むことによって救われるであろう。（「テモテへの第一の手紙」二・一一―一五）

この最後の引用文にもあるように、パウロの男性優位主義のよってきたるところは、どうやら「創世記」第二章に記されているアダムとイヴ（エバ）の誕生の〈順序〉にあったようである。たしかに第二章七節には「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた」とあるが、イヴが造られるのはそれからしばらく後で、しかも野の獣や空の鳥を造った後で、その目的はアダムに「助け手（help）」（同一八、二〇節）が必要になったからであり、それで「主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造

り」（二二節）云々ということになる。しかもイヴは、アダムのように「命の息」を直接吹き込んでもらうという「栄光（グローリー）」に浴してはいない（少なくともそういう記述はない）。最初の引用文の、女が男から生まれたという、その点だけを見れば今日の生物学とは相いれない説も、女が造られた目的も、また女は直接神の栄光に浴するのではなく、男の栄光に浴するという一段階落とした扱いも、この「創世記」の記述に淵源がある。しかし、これもまた周知のように、「創世記」第一章には、とくにその〈順序〉に関しては、第二章とはまったく様子の違ったアダムとイヴの誕生の話が記されている。そこでは、「神は自分のかたちに人（man）を創造された。すなわち、神のかたちに［彼ら（them）を］創造し、男と女とに創造された」（第一章二七節［欽定訳によって一部補った］）。この「人（man）」は、後段部分では複数形の代名詞で受けていることからも明らかなように、総称的な集合名詞で男女双方を指しているから、ここでは男と女は〈同時に〉造られている（少なくとも欽定訳の訳者はそう解釈しているし、種々の聖書の注釈書もそのように説明している）。このように第一章と第二章で矛盾が生じているのは「創世記」が複数の文書から成り立っているからだが、いずれにせよここでは〈順序〉は同じで、男と女は後先なく平等に造られている。もしパウロがこの第一章の人間創造説をもっと重視していれば、上記のような手紙は書かなかったかもしれないが、もっぱら第二章の方を採用したところに、パウロの今日的な意味での男性優位主義者たる所以があると言えるかもしれない。（実は二番目の引用文の「男（a man）は、神のかたち」であるというのは、第一章にしかない記述を元にしているのだが、元は今も見たように男女を合わせた集合的な「人（man）」を「男（a man）」にずらしているので、そのあたりにも、どうしても男を女の「かしら」に位置づけたいパウロの気持ちが読めるかもしれない。）

いずれにせよ老クレア師は、こうした女性観を含むパウロの教えを最上のものと考えていた。

彼の理解するところでは、新約聖書はキリストの書というよりパウロの書であって――それは議論というより陶酔であった。

（一二三）

と語り手は特筆しているほどである。この徹底したパウロ陶酔者の〈父〉から生まれた〈双子〉の兄弟ともいうべきクレアとアレックが、テスを「支配」し、「服従」させ、「仕え」させ、また「教育」し、さらにその〈主人〉たろうとするのは当然で、たとえばテスと再会したアレックが、「覚えておけよ、俺は以前お前の主人だったが、これからもまた主人になるぞ。お前が誰の女房であれ、

お前は俺のものなんだ」（二六一）というのもこのことである。またクレアが、婚約直前に、テスの旧家の血筋が、俗世間にテスを受け入れさせるのに有利であると言いつつ、もっともそれは「ぼくがきみを、ぼくが望むような教養ある女に仕上げた上の話だけどね」（一四八）と言っているのも、同様だろう。テスの「教育者」としてまた「主人」として、要するに〈女〉の上に立つ「かしら」である〈男〉として、二人ともテスを支配し、服従させ、自由に扱おうとする。「主人（master）」の反意語のひとつに「奴隷（slave）」があるが、〈クレア＝アレック〉はテスを「奴隷」とみなしていたとも言えるし、またその意味でアレックが「お前［テス］の心はその男［クレア］の奴隷になっている（enslaved）」（二五二）というのも、正確な表現と言わねばならない。つまるところ〈クレア＝アレック〉は「主人」として、テスの心と体を「奴隷」として扱おうとしているとも言えるわけで、要するにこれが男性優位主義的な〈支配〉の本質であり、レイプはその具体的な行為のひとつにほかならない。

この〈男〉に支配される〈女〉がテス一人ではなく、二人以上いることにも注意しなければならない。アレックが名前の明かでない複数の女性（の体）を弄んでは泣かせていたように（七〇―七一）、クレアは名前の明かな一人の女性（の心）を弄んでは泣かせている。その犠牲者がイズ・ヒュエットで、クレアはテスと別れた直後、かねてより自分に好意を寄せているのを知っていたイズにたまたま出会ったとき、テスの代わりにブラジルに誘い、喜んで応諾したイズと馬車で駅に向かう途中で気を変えているが（二一一―一二）、そのためにイズは泣き（二一三）、後々まで深く傷つく（二三〇）のに対して、クレアは一応謝りはするものの、その謝罪が受け入れられればあとはきれいさっぱり忘れている。[16] この〈男〉の謝罪は〈女〉に許されて当然という男性優位主義は、先の新婚初夜にクレアが「見知らぬ女との四八時間の遊蕩」（一七七）の告白をしてテスの許しを求めたときにも見られたものだが、またそれが〈エゴイズム〉とともに双面一体の〈クレア＝アレック〉の「一体」の部分を成していることは前にも触れたとおりだが、この〈クレア＝アレック〉に弄ばれて泣かされる女がそれぞれ二人以上いるところに、テスがそうした犠牲者としての女の〈全体〉を象徴する役割をになう契機がある。「一度犠牲になったらずうっと犠牲――それが掟なんです」（二六一）とテスはアレックに言い、男性優位主義の社会の「掟」のなかで、その犠牲者の「悲しみ・苦しみ（sorrow）」を表現する。アレックのレイプによって生まれて死の床に横たわる子供につけた「ソロー」という名前が、犠牲者としての〈女全体〉の悲しみや苦しみの表現となるのもここからで、またここから、〈クレア＝アレック〉によって象徴される〈男全体〉と、テスによって象徴される「犠牲者」としての〈女全体〉の、支配・被支配の「政治的な」関係性の悲劇の構図が浮かび上がってもくるのである。

そしてこの悲劇の頂点（クライマックス）が、〈女〉の〈男〉に対する「復讐」である。支配され、弄ばれて泣かされて、「犠牲者」でありつづけた〈女〉が、〈男〉にそのあがないを求めるのは当然で、前章でも見たように〈クレア＝アレック〉が自分のエゴイズムにまったく無反省である以上、何らかの形で埋め合わせをしてもらわなければならない。そうしなければ、先の「創世記」第一章に記されていたような、分け隔てなく〈同時に〉創造された男と女のあいだのバランスがとれないからである。したがって〈クレア＝アレック〉という男性優位主義者にして身勝手（セルフィッシュ）な〈男〉は、この犠牲者である〈女〉の「復讐」を受けなければならない。女を支配し、自由に扱い、弄ぶことがすなわち〈レイプ〉であるとすれば、テスのアレック殺害は、ダーバヴィル家の先祖の〈二人〉の女を描いた「二枚の等身大の肖像画」（一七〇）にクレアがみとめた、「異性に対する凝縮された復讐の意図」（一八四）の成就として正確に重なり合う。

クレアがテスとの新婚初夜のために借りた昔のダーバヴィル家の屋敷の「鏡板（パネル）」に描かれていた、二百年ほど前のダーバヴィル家の〈二人〉の女たちの肖像画は、テス自身も驚くほどの「恐ろしい」形相だが、その「誇張された顔かたちをたどってゆくと疑いなくテスの美しい顔が浮かび上がってくる」とあるように（一七〇）、これは疑いなくテスの先祖の女たちの――というより〈女全体〉を象徴する〈ダーバヴィル家のテス〉の等身大の肖像画にほかならない。クレアは、この屋敷に着いてすぐこの絵を見て驚き、その夜テスの告白を聞き、さらにその後もう一度、テスが一人で眠る寝室の「入口」の上にこの絵を見たとき「凝縮された復讐の意図」を感ずるので、それはテスの「告白」それ自体がクレアに対する復讐であったことを表しもするが、しかしこのときの復讐は、まだほんの序の口にすぎない。それはアレックの場合も同様で、テスと再会してまたぞろテスへの欲望を再燃させ、説教師をあっさりやめてしまったときに、「きみはなんて素晴らしい復讐をやってくれたんだ！」（二五九）と叫ぶところがそれに当たるだろう。アレックのレイプに対する「復讐」は、このあとナイフによる殺害によって成就するのであり、そのとき双面の〈クレア＝アレック〉の片面のクレアが、もう片面を失って半死状態に、あるいは死んだも同然の状態に陥っている様は前章で見たとおりである。

そしてここで、ダーバヴィル家の「馬車伝説」という紗がかかったようにおぼろげな事件が、レイプに対する復讐の悲劇のコンテクストのなかでその「政治的な」意味を明らかにする。その伝説とは、「十六世紀か十七世紀」（一六八）に、ダーバヴィル家の男が「ある美しい女を誘拐し」、「女が運ばれて行く馬車から逃げだそうとして争っているうちに、男が女を殺したか――女が男を殺したか」して、以来「ダーバヴィルの血を引いた人間だけに馬車の音が聞こえる」というものである（二七九）。男が暴力で女を支配しようとする誘拐やレイプが殺人に至る悲劇として、ダーバヴィル家の血を通じてテスに反響しているというのだが、この殺すのが男か

女かあえて曖昧にされているところに、この伝説の誘拐もしくはレイプと殺人が、ルクレティアのレイプ後の自殺とその後のタルクィニウスの死と、ローマの王制の死という政治体制の変革とも反響しながら、[17] テスのアレック殺害とその後の彼女の死に「政治的な」意味を付与する。その政治的な意味とは、たとえば次のようなところにもう少しはっきりと見ることができる。

> 彼［クレア］が衰退した力として軽蔑してきたテスの一族――権勢をふるったダーバヴィル家の血統――への歴史的な興味が、いま彼の感傷を呼び覚ました。なぜ今までこうしたことの政治的な価値と想像的な価値の違いに気づかなかったのだろう？　後者の見方からすれば、彼女がダーバヴィル家の血統を引いているということは大変な事実だった。経済学的には無価値でも、夢想家や、世の衰退と没落について道徳的な省察をこころみようとする者にとっては絶好の材料だった。・・・何度も何度も彼女の顔を思い出しているうちに、彼はその顔の中に、先祖のご婦人方に優雅な趣を添えていたに違いない、威厳のきらめきが見えたように思った。そしてその幻影は、彼が前に感じた、あのむかつくような感覚を残した〈霊気（オーラ）〉を彼の血管に送り込んだ。
>
> （二六九、傍点筆者）

ここはクレアがブラジルで、前章でも触れた「コスモポリタンな心」を持った男の忠告によって、テスが処女でなかったことへのこだわりがようやく消え、テスの顔を感傷的に思い出しているところである。クレアはかねてより「政治的には、家柄が古いことの価値には疑問をもっています。・・・しかし、詩的に、劇的に、いや歴史的にすら、ぼくは旧家というものに愛着を感じています」（一三〇）と言っているので、この点はブラジルへ行っても基本的に変わってない。クレアがいう旧家の「政治的な価値」とは、社会の「衰退と没落」の象徴としての否定的な価値の謂で、その見方からのクレアの旧家への批判はあちこちに散見される。一方、その「想像的な価値」とは、詩的な、劇的な、歴史的な価値とも言い換えうる、旧家にまつわる「威厳」や「感傷」を呼び覚まし、「愛着」を感じさせるような好ましい価値である。クレアがブラジルに来てから変わった点は、この二つの価値をはっきりと分けて、その「想像的な価値」のみを肯定し、「政治的な価値」を否定し去ったことである。だからクレアは、それまでその二つの価値の違いに気づかなかったことを後悔し、テスの顔に旧家の末裔の「威厳のきらめき」を見出してそれを善しとし、一方「政治的な価値」には目をふさいだのである。しかしその「政治的な価値」とは、実は単に旧家の「衰退と没落」の意味だけでなく、その「馬車伝説」でも

暗示されていたように、暴力で性を支配しようとする男と女の支配・被支配の、人と人との関係の力学としての「政治的な」意味合いも含まれていたのだが、クレアはそれにも目をふさいだのである。これがブラジルにおけるクレアの〈反省〉の内実で、彼にとって〈男〉は依然として〈女〉を支配する「かしら」のままであり、むしろ目をふさぐことによってこの関係を固定したのである。

このようなクレアであるから、〈男〉と〈女〉を、対等な人間同士の〈自己〉と〈他者〉の関係として見ることができない。新婚初夜にテスの告白を聞いて、「あるがままの彼女」（一六四）を受けいれることができなかったのはこのためだし、その点は今でも変わってないのである。またこのようにあるがままの〈他者〉が見えてない以上、同様にあるがままの〈自己〉が見えているはずもなく、彼はブラジルに来る前も後も、一貫してテスのアイデンティティが見えず、また実は身勝手なエゴイストであるという自分のアイデンティティが見えてないのも、前章で指摘したとおりである。たしかにクレアは、「地位や富といった物質的な栄誉」（九一）を軽蔑し、「知性の自由」（九二）を求める「良心を持った男」（一二一）で、「進歩した悪気のない青年」（二〇八）であるから、旧弊な貞操観念に捕らわれていたことまでは反省できても、そのあたりが限界で、そこから先の、自分がただの身勝手な男性優位主義者であるという自分に都合の悪いアイデンティティは直視できず、〈女〉を支配する絶対的な権力者の〈男〉という自分の「政治的な価値」には目をふさいでいる。先の〈命名〉にちなんでいえば、クレアに「エンジェル」という洗礼名を贈った名付け親（ゴッドマザー）のピトニー夫人は、その名前だけでなく、死ぬ前に、将来エンジェルの妻になる女性に宝石を遺贈しているが（一七二）、そこにはおそらく、夫たるもの妻になる女性には「天使」のごとくあれという願いがこめられていたのだろうが、実態は、「間違って名づけられたエンジェル」（二六六）と語り手に言われているように、一面ではおよそ「天使」とはほど遠い、女を支配したがる身勝手な男性優位主義者であり、またそうした自己のアイデンティティがまったく見えてない無自覚な男だった。またこうしてみれば、テスを棄てたまま〈天国〉のタルボットヘイズから艱難辛苦の待つ〈地獄〉のようなブラジル帝国（当時）に墜ちて行ったエンジェル・クレアの姿には、堕天使ルシフェルのイメージを見ることができるだろうが、[18] これもクレアが〈天使〉と〈悪魔〉の双面をそなえた〈クレア＝アレック〉というヤヌスであることを示すものにほかならない。この〈悪魔〉に関してさらにいえば、語り手が、一見無私で篤実な宗教者のクレアの両親について、「自分たちの中に棲む悪魔さえ知らなかった」（二〇七）と言っているのは、この〈悪魔〉の面も、また自分が悪魔であることに〈無自覚〉な面も、そのパウロの教えと同様に、親から息子に伝えられたものであったことになるだろう。「その異端思想にもかかわらず、エンジェルはしばしば、人間的な側面では、兄たちよりも自分の方が父に近いと感じていた」（一三二）とあ

るように、人間として実に多くのものを父親から受け継いでいたのであり、なかんづく〈天使〉であると同時に〈悪魔〉でもあるという双面一体の（もしくは二重人格の）アイデンティティと、そのことに対する無知・無自覚ぶりとを、何にもましてよく受け継いでいたのである。

このようにクレアが、いくら自分のアイデンティティに無自覚で、自分の〈支配欲〉に目をふさいでも、支配される側の「悲しみ・苦しみ」が、またその「犠牲者」のあがないを求める「復讐の意図」が消えるわけではない。それどころか、その無知であることや目をふさいだことの罪も含めて、すぐにその報復を受けることになる。先の引用文の最後で語り手が言っていたように、クレアには好ましいテスの顔の「威厳のきらめき」の「幻影」が、「彼が前に感じた、あのむかつくような感覚を残した〈霊気（オーラ）〉を彼の血管に送り込んだ」のである。つまり、クレアが新婚初夜に見たダーバヴィル家の先祖の二人の女の肖像画に浮かんでいた「異性に対する凝縮された復讐の意図」が、オーラとなって彼の体内に届けられたのである。「創世記」第一章にしたがえば、等しく同時に創造されたはずの〈男〉に、いわれなく支配され、犠牲に供されたために、そのあがないを求める〈女〉の、支配者に対する被支配者の「政治的な」復讐の意図がクレアに向けられていたのであり、またダーバヴィル家の先祖の〈二人の女〉という〈女全体〉の復讐の意図が、その末裔のテスの「顔」を通じ、双面の〈クレア＝アレック〉という〈男全体〉に向けられて、いよいよその復讐が遂行されようとしていたのである。最終の「第七局面」が「遂行／成就（"Fulfillment"）」と題されて、ブラジルから帰ってきたクレアの登場から始まっているのも、いよいよこの復讐が成就されることを表している。〈クレア＝アレック〉のアレックを刺し貫いたテスのナイフの切っ先が、クレアの体内にまで届いてクレアを「半死状態」に至らしめたことは先にも触れたとおりであり、またこのテスのナイフによる殺害が、ローマの〈政治〉を変えたルクレティアのナイフによる復讐とも重なりつつ、この被支配者による支配者に対する政治的な復讐の成就を表すものであることは、あらためて言うまでもないだろう。

＊

人を殺せばみずからの死をもってあがなうことになるのは当然で、テスにもそのことは分かっており、外国に逃げようとするクレアとは違って、いずれは捕まって処刑されることを予感している。テスが最後にたどりつくストーンヘンジの場面は、このテスの死を意味づけるさまざまなイメージもしくは記号で満ちあふれている。たとえば、テスとクレアがここに着いたとき、この先史時代からの巨大な環状石柱群は、そこを吹きわたる風がかなでる「なにか巨大な一弦のハープの調べのような」（三一〇）音が聞こえていた。

この風による「ハープの調べ」は、先の楽園のようなタルボットヘイズでエンジェル・クレアが弾いていた〈天使の楽器〉と響き合いつつ、テスの魂を解放し、救済してくれるかのようである（本稿第一章参照）。古代ケルトのドルイド教では、ハープの音は死者の体から魂を解放し、天国に運んでくれるものであったという（Vries）[19]。このいにしえの祭祀遺跡の祭壇に横たわって「顔の上は大空だけ」（三一一）と言いながら、「長いあいだ柱のあいだを通る風の音に耳を傾けている」（同）テスの姿からは、先にも触れたルクレティアの「翼のある霊」と、「私たちの魂は生きているうちでも体から抜け出すことができる」（九四）というテスの言葉が想起されよう。――テスがタルボットヘイズの朝食の席でその話をしたとき、農場主の乳搾りのディックが「まるで絞首台（gallows）の準備をするように、テーブルに［肉切り用の］大きなナイフとフォークを突き立てた」（同）と、いささかその場にそぐわない異様とも思われる記述があったが、その後テスが「青鷺荘」で、やはり朝食の「肉切り用のナイフ」（三〇二）でアレックを刺し殺し、そのためにこれから絞首台に登ろうとしていることを考えれば、このタルボットヘイズの場面がそのままストーンヘンジにつながっていることは明白だろう。「ストーンヘンジ」という名前自体が、字義的には「絞首刑の石」（hanging stone; gallows cross）の意でもあるという（Jobes）[20]。そしてこのテスの死は、これまでと同様に、ギリシア・ローマ神話や聖書によるコードにしたがいつつ、あげてテスの〈魂の救済〉を表そうとするかのように描かれている。

テスはここで、風のかなでる「ハープの調べ」を聞きながら、その肉体から魂（soul）を解放していたかのようだが、またおそらくそのために、テスはクレアに、二人が死んで肉体を超越した「霊魂（spirit）」（三一一）になったとき、再会できるかとたずねる。テスにとってクレアの「自身（セルフ）」が必要不可欠なのはすでに見てきたとおりである。クレアは、しかし、その問に答えることはできない。「返事を避けるために、彼女にキスした」（三一一）。テスは落胆して、「それは会えないという意味なのね」（同）と言ってすすり泣くが、クレアが答えられないのは、キリストの復活が信じられないために聖職に就かないというクレアには（九一）、「復活」は「聖霊（Spirit）による」というパウロの教えも信じられず（「ローマ」一・四、八・一一、他）、したがって自分たちが死んだ後まで「霊魂（スピリット）」となって再会できるなどとはとても思えなかったためだろう。かたくなに沈黙を守るクレアについて語り手が、「彼よりも偉大な方のように」（三一二）黙して答えなかったと言い、クレアを、大祭司カヤパの質問に黙って答えなかったイエスにたとえているのが、そのことをよく表している。カヤパはイエスを死刑にするために、イエスがかつて「神の宮を壊して三日後に建てる」と公言したとする証言の真偽を糾したときに黙して答えなかったのだが（「マタイ伝」二六・六一―六三）、このイエスが公言したとされる言

葉の趣旨は、「福音書記者」のヨハネによれば、神の宮とはイエスの肉体の意で、処刑後三日で復活することのたとえだった（「ヨハネ伝」二・二一－二二）。テスは自分が処刑されたあと霊魂となって（あるいは霊魂によって復活して）クレアと再会したいと言うのだが、死後の霊魂の復活が信じられないクレアはかたくなに沈黙を守り、テスは落胆したまま眠りに落ちる。このクレアの、霊魂の復活が信じられないという点については、やはりタルボットヘイズのある夜明けの場面を想起せざるをえない。

［夜明けの薄暗闇は］しばしば彼［クレア］にキリストの復活の時刻を考えさせた。マグダラのマリアがそばにいるかもしれないとはほとんど考えなかった。・・・彼女［テス］は幽霊のよう（ghostly）に、あたかも魂だけ（merely a soul at large）になってしまったかのように見えた。実際に彼女の顔は、そのようには見えなかったが、北東からの冷たい明け方の微光をとらえていたのであり、また彼の顔も、自分ではそのことには思いも及ばなかったが、彼女と同じ相貌を呈していた。

（一〇二－一〇三）

マグダラのマリアが、かつては娼婦だったがイエスを信じることによって清められ、また復活したキリストに最初に会い、それがイエスであることを認めた最初の人物であることはよく知られている。そのマリアにテスがたとえられているので、テスが肉体的には汚れていても心は――あるいは魂は――清純であるということの意味は分かりやすいが、ここで見落としてはならないのは、テスがそのように見えたのは「キリストの復活の時刻」だったとあるように、死んで復活したキリストの霊魂（Spirit）に、生きているテスの魂（soul）がたとえられていた点である。明け方の薄暗闇のなかで、マグダラのマリアが認めたキリストの復活が「霊魂」によるものであったように、テスも「幽霊のように、あたかも魂だけになってしまったかのように見えた」のである。もともと「魂は生きているうちでも体から抜け出すことができる」と言っていたテスは、ちょうどキリストが死んだ肉体から解放されて「霊魂」となってマリアの前に現れたように、生きている肉体から魂が解放されて「魂だけ」になっていたのである。このようなテスをすぐそばで見ながら、しかしクレアは、そうしたテスの魂のありようを「ほとんど考えなかった」し、またテスと「同じ相貌を呈し」、つまりクレア自身も同じように肉体から魂を解放して「魂だけになっていた」にもかかわらず、自分のそれについては「思いも及ばなかった」のである。たしかにクレアは、テスの結婚前の〈汚れ〉についてはその後こだわりをなくしたが、テスの「魂」については、

最後のストーンヘンジに至るまで、ほとんど考えもしなければ理解も及ばなかったのである。テスの、死んだあと霊魂となってまた会えるかという最後の質問にも答えられずに沈黙するほかなかったのもこのことを表しているし、またこのように自分の魂のありようにも、あるいは自分のアイデンティティにも無知・無自覚なクレアであるからこそ、テスは自分の〈身代わり〉に妹のライザ・ルーを遺してやったのだろう。ライザ・ルーが、いまだに自己のアイデンティティに無知（イノセント）なアダムとしてのクレアの目を開かせ、「自身（セルフ）」を見つめさせるための〈知恵の木の実〉の化身でもあることは、前章の最後で指摘したとおりである。(21)

この明け方のタルボットヘイズの場面がストーンヘンジにそのままつながっているのは、もうひとつ、上記引用文に見えていた「北東からの冷たい明け方の微光」がある。それはストーンヘンジでは次のように記される。

はるか北東の空に、彼には、柱と柱のあいだに、ひとすじの水平な光が見えた。（三一一）

ストーンヘンジは、誰がいつ頃つくったのか定かではないが、かつて太陽信仰が行われていたようで、テスが横たわる中心の祭壇の石から、夏至の太陽が昇る「北東の方向」に、二本の石の柱の上に一本の横石を渡した「三石構造物」（トリリトン）が立ち、その向こうに火炎の形をした太陽石があり、そのあいだに犠牲（いけにえ）の石があった（三一二）。そしてそこで太陽への犠牲が捧げられていたと、クレアはテスに説明している（三一一）。これがどのような宗教であったのかはクレアも説明していないし、また実際にも明かではないようだが、この先史時代のイギリスで行われていた太陽信仰からは、おのずと、先に第二章でも触れたギリシアの太陽神ヘリオス／アポロンへのそれを想起させる「太陽崇拝（heliolatries）」（六七）への言及と、さらにヤヌスを太陽神とする古代ローマの太陽信仰が思い起こされよう。かつてアレックのレイプによって傷ついていたテスを癒してくれたのは、早朝の森の中でテスの前に現れた、いかにもアポロンを彷彿とさせる、「黄金の髪をし、顔は輝き、優しい目をした、神のような生き物」の「太陽」だった（六七）。またテスの運命を司る双面の門神ヤヌスが、古代イタリアの太陽神でもあったことは、本稿序章の最後にも掲げたとおりだが、テスとクレアがストーンヘンジに着いたとき、語り手がそこを「すべてが扉と柱」（三一〇）と言い、あちこちにある「三石構造物」がつまるところ〈門〉の形状をしているのも〈門神〉のエンブレムととらえれば、この太陽信仰をヤヌスのそれと重ね合わせてみることもできるだろう。またテスが祭壇の上で眠っているあいだにやってくる警官が、四方向から近づいてくるところにも、ヤヌスの姿が見

られるかもしれない。序章の最後に掲げたように、ヤヌスは通常は東西あるいは左右の二方向を向いた双面神だが、時には四方向を向く図像で表されることもあり、ここではまさにその後者の例というべく、正確に四方向からやってきている。一人は「東の方」（三一二）から、もう一人が「西の方」（同）から、また「右」と「左」からも一人づつ（同）、迫ってくる。しかも時刻は明け方、ヤヌスが太陽神として空の天幕を開いて光を入れるときに、またアポロンが森の中で傷ついていたテスを癒そうと姿を見せたのと同じ時刻に、警官が近づいてくる。この警官がテスを逮捕し、テスを死に至らしめることになるのだが、またこの警官が、三石構造物による〈門〉を通って射す「ひとすじの水平な光」とともに四方向から近づいてくるところに、それまでテスの旅路につねに同行してその運命を司っていたヤヌスが、最後にテスの魂を解き放とうとしている姿が読みとれるだろうし、あるいは同じ明け方にマグダラのマリアがキリストの霊魂による復活を認めたように、この解き放たれたテスの霊魂に〈復活〉を重ね合わせて見ることができるだろう。またキリストの磔刑がアダム以来の人間の罪をあがなうための犠牲（いけにえ）であったとすれば、祭壇上に横たわるテスの姿に〈犠牲〉のイメージを読むこともできるだろう。男性優位主義の社会にあって〈男〉の支配に異義を申し立て、〈女〉としてのアイデンティティの確立を求めたテスの、そのために犠牲に供されねばならなかった悲劇の主人公の姿が、ここにはっきりと認められるからである。この章の最後でテスが、逮捕しにきた警官に、あらかじめ逮捕が分かっていてその準備をしていたイエスのように、「どうぞ（"I am ready."）」（三一三）と、その用意ができている旨を伝え、次の最終章で処刑されているのも、この犠牲（いけにえ）の儀式が執り行われ、その後霊魂となって復活し、魂が解き放たれたことを表すものだろうし、またその最終章でテスの〈身代わり〉のライザ・ルーが登場しているのは、先に序章でも触れたように、縛られてタルタロスに落とされたプロメテウスが、ケンタウロス族のケイロンという〈身代わり〉を得て〈救済〉された神話[22]に重ね合わせつつ、テスの魂の救済を表すものだろう。そしてプロメテウスを捕縛してタルタロスに落としたのも、また解放して救済したのも、つまるところゼウスの「戯れ」であったように、テスの運命を司ってそれを翻弄し、最後にその魂を救済するのもヤヌスの「戯れ」であるとすれば、その「神々の司」としては、フレイザーの説に見られる〈ゼウス＝ユピテル＝ヤヌス〉はいよいよ重なり合い、テスの物語をヤヌスの神話のコンテクストにおいてとらえ直してみる必要がいっそうはっきりしてくるだろう。テスが初めて舞台に登場するときは「小門（wicket-gate）」（七）を通り、最後にライザー・ルーが〈身代わり〉としてやはり「小門（wicket）」（三一三、三一四）を通って退場しているのはすでに指摘したとおりだが（序章および第二章）、これもテスの悲劇が最初から最後まで、〈門神〉でもあれば〈始まり〉と〈終わり〉の神でもあるヤヌスの影の下で演じられ

ていたことを表すものであることは、あらためて言うまでもないだろう。

（了）

注

（1）安達秀夫「『ダーバヴィル家のテス』とヤヌスの神話（一）」（『立正大学文学部研究紀要』第十三号、一九九七）二三頁参照。

（2）Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles*, A Norton Critical Edition, 3rd ed., (New York: W.W. Norton, 1991) による。以下『テス』と略記するが、そこからの引用はすべてこの版により、引用箇所の後に漢数字で頁を記す。なお訳文はすべて拙訳だが、以下の訳を参照させていただいた。井上宗次・石田英二訳（岩波文庫、一九六〇）、井出弘之訳（集英社ギャラリー・世界の文学3、一九九〇）、大沢衛訳（築摩世界文学大系40、一九六一）

（3）ダーバヴィル家の始祖のサー・ペイガン・ダーバヴィルがノルマンディからイギリスに渡ってきたのは一〇六六年のノルマン・コンクェストの時で、その後十七世紀半ばのクロムウェルやチャールズ二世の頃までは騎士の家系であったとされているので（二）、没落したのはその後のこと。一方イギリスがローマに占領されていたのは紀元前五五年のカエサル以来、せいぜい五世紀の初め頃までであるから、この門番の言うことは、リアリズム的に考えれば時代錯誤とか誤解とか、無知とか誇張とかいい加減とかいうことになるのかもしれないが、そのように読んだだけでは〈読み残し〉が大量に出てくるところに『テス』の特質があることは、本稿序章以来繰り返し指摘してきたとおり。

（4）『テス』の最後には「（アイスキュロスの句で言えば）〈神々の司〉はテスに対する戯れを終えた」という一節があり、それは『テス』を、アイスキュロスの描いた〈縛られたプロメテウス〉の神話からはじまって、ゼウスの「神々の司」の地位を守るためのテティスの結婚式と、そこに投げ込まれた黄金の林檎とそれへのパリスの審判とその結果のトロイア滅亡と、アエネアスのトロイア脱出とイタリア定着とローマ建国を経て、ルクレティア凌辱事件とそれによるローマの政変あたりまでつづく、一連のエピソードによる古代ローマ建国伝説のコンテクストにおいてとらえ直すように求める示唆として読む必要があることは、先に本稿序章で指摘したとおり。またアエネアスをイタリアで迎えて建国のための土地と娘ラウィニアを与えた王ラティヌスは、初代までさかのぼればファウヌスとファウナ兄妹と、ゼウスに追われてギリシアから逃れてきたサトゥルヌス（クロノス）を迎え入れたイタリアの〈始まり〉の神であるヤヌスにまで至る神話があるので、この「神々の司」の句の背景には、そのあたりまで含めて視野に入れておく必要がある（ヤヌスの娘カネンスとサトゥルヌスの息子ピクスの子供がファウヌスとファウナで、ファウヌスの息子がラティヌス）。そしてその「神々の司」は、アイスキュロスにとってはギリシア悲劇であるから当然ゼウスを指していたが、J・G・フレイザーの『金枝篇』（簡約本第一六章）によれば、その後のローマでは、とくにネミ湖畔のアリキアの聖なる森を守る女神「森のディアナ」とその配偶者「森の王」の組み合わせとしては、「ゼウスとディオネ、ユピテルとユノ、ディアヌス（ヤヌス）とディアナ（ヤナ）等と種々変って知られており、その名は彼らを礼拝した個々の部族の方言に従って形を異にしていても、本質上は全く同一であった」という（永橋卓介訳、岩波文庫、第二巻、四四頁［名前の長音は省かせていただいた］）。してみると、テスが「アルテミス（＝ディアナ）」（一〇三）にたとえられているところもさることながら、「森の王」としては、〈ゼウス＝ユピテル＝ヤヌス〉という同一性が

成り立ち、それに従えばテスにとっての「神々の司」はゼウスであると同時にヤヌスでもあったことになるだろう。このフレイザーの説が今日どの程度支持されているかについて筆者はつまびらかにしないが、要は『金枝篇』を熟読していたと伝えられるハーディがこの点をどのようにとらえ、どのように『テス』のテクストに織り込み、われわれがそれをどのように読み解くかの問題であることも、先に序章で指摘したとおり。

(5) テスの名前が、〈テス・ダービフィールド〉から〈テス・ダーバヴィル〉に変わることが、テスのアイデンティティ確立の表現になっていることは、本稿第一章以降繰り返し指摘しているとおりで、クレアに出会ったテスがその「教育」を受けて成長し、教養の面でも物ごしの面でも洗練の度を高めてゆくことが、次第に〈テス・ダーバヴィル〉に近づいてゆく過程にもなり（たとえば数年ぶりに再会したアレックに「だれがそんないい英語を教えてくれたの」（二四四）と聞かれるところはその一つの表れ）、そのままクレアと結婚して、そしてクレアが「あるがままの彼女」（一六四）を受けとめることができさえすれば、テスはそのアイデンティティを確立することができたはずだが、それが最後の一歩手前でクレアはつまずき、その結果テスは、二つのアイデンティティの間で引き裂かれ、元の〈テス・ダービフィールド〉に戻ることもできず、さりとて〈テス・ダーバヴィル〉になることもできず、いわば宙吊り状態に置かれることになった、と考えられるだろう。言い換えればテスは、どっちつかずのアイデンティティ不全の状態に陥ったわけで、つまり自分が何者なのか分からず、したがって他人との距離をどうとっていいのかも分からない状態に置かれたわけで、こうしたテスが見知らぬ他人との出会いを恐れるのは当然で、両親の許を去ってフリントコム＝アッシュに着くまでのあいだに、テスが「自分のアイデンティティを消して（obliterating her identity）」（二一六）、他人との出会いを避けていたというのもその表れだろうし、またハンカチで顔を隠したり、鋏で眉毛を切って醜く装っていたのは（二一九）、単に見知らぬ男につきまとわれるのを防ぐためだけでなく、その〈不全状態〉のアイデンティティを他人に悟られまいとする具体的な行為であったろう。――この名前（とくに苗字）とアイデンティティの関係で、テスとはまったく逆のケースがクレアとアレックで、アレックの場合はやりての商人だった父親のサイモン・ストークが「容易に正体を見抜かれる（identify）ことのないように」、没落した貴族の名前を付け加えて「ストーク＝ダーバヴィル」とした「偽物」で（二七－二八）、アレックはそのことを承知の上でまったく違和感を感じないどころか、元の「ストーク」すら省いて「ダーバヴィル」だけを名乗るほど自己のアイデンティティに無自覚・無頓着であり、他方クレアについては、タルボットヘイズで、仕事を求めてきたマットという名の少年に「苗字」を尋ねたら「そんなもんがあったなんて話は聞いたことがない」と答えたのにいたく感動して「半クラウン」の金をやったと記されている（一〇〇－一〇一）。後述するようにクレアはアレック同様に自己のアイデンティティにまったく無自覚だが――というより「苗字」を否定したり元の「ストーク」を省くところには、二人にはむしろ積極的にアイデンティティを否定しようとする姿勢も読み取れるが、これもそれとは逆のテスの場合とのコントラストを強め、テスのアイデンティティ確立の劇を浮き彫りにしていっそう際だたせる役割を果たすことにもなっている。

(6) フリントコム＝アッシュが、ウェルギリウスの『アエネイス』に描かれている冥界の〈地獄／タルタロス〉と重なり合っているのは、この脱穀機が「プルトの主人」と呼ばれていたことからだけでなく、ここにはまた、やはり『アエネイス』に描かれていた「復讐の三姉妹」を思わせるカー・ダーチ姉妹が登場していることからも言えるだろう（二二七、本稿第二章参照）。ちなみにアエネアスが降って行った冥界にも

「火打ち石（silex／flint／crag）」は出てきている（六・六〇二行他）。またこの〈地獄〉には、ローマのウェルギリウス的なそれだけでなく、聖書的な〈地獄〉のイメージも見ることができる。それはたとえば、フリントコム＝アッシュで働くテスとマリアンが「蝿のよう」（二二四）だったと記されているところに読みとれるだろう。ここの農場主グロービーはテスに向かって自分が「主人（master）」であることを二度にわたって強調しているので（二二八、二五〇）、その点でこの男はまさに〈蝿の王〉（Lord of the Flies; fly-god）の異名で知られたベルゼブルと重なり合うからである。このベルゼブブともバアル・ゼブブ（「蝿の創造者・支配者」の意）とも呼ばれる悪霊のかしらを、イエスがサタンと同一視したことは福音書に記されているとおり（「マタイ伝」一二・二六他）。このフリントコム＝アッシュがウェルギリウス的であると同時に聖書的でもある点は、タルボットヘイズが〈エデンの園〉や〈天国〉のようであったと同時に『アエネイス』の〈エリュシオンの野〉のようでもあったのと対をなしていて、ここにも『テス』が〈ローマ建国伝説〉と〈楽園喪失譚〉の二つのコードで書かれていることがうかがわれる。前号注（29）参照。

（7）つねに受苦しつづけるテスが、同様に受苦しつづける〈縛られたプロメテウス〉に重ね合わされて描かれているのは先に本稿序章でも指摘したとおりで、またそれのより具体的な表現として、彼女がフリントコム＝アッシュ農場との「契約」で〈縛られたテス〉として描かれていることも今指摘したとおりだが、それに加えてもうひとつ、厳冬の戸外で働くテスをさらに苦しめるように、北極の向こうから「見知らぬ鳥」が現れて雪が降り始めるところは（二二六－二七）、やはりプロメテウスをさらに苦しめるように「大鷲」（一〇二〇行）が現れて、その縛られた体から肝臓を喰らうところを彷彿させることも指摘しておいたほうがいいだろう。またそうすると、テスがフリントコム＝アッシュでは「結婚指環」をはめておらず、リボンで吊るして持っていたというのも（二二二）、文字どおりの意味以上の意味を持ってくるかもしれない。伝承によればゼウスは、プロメテウスを解放したのち、かつて捕縛されていたことを忘れないよう象徴的に「指環」をはめさせたので、テスが指環をはめてないという記述は、テスがまだ解放される前の〈縛られたテス〉であることを表すことにもなるからである。

（8）クレアとアレックが常に逆方向を向いた双面のヤヌスで、互いに相手の顔が見えないのは、先に第一章でも指摘したように、たとえば二人が同じ「青鷺荘」にいながら決して顔を合わせてないところに象徴的にあらわれているが、ここでまたもう一度、アレックがクレアについて次のように言っている箇所を引いてもいいだろう。「・・・彼はまるで神話の登場人物のようだ。・・・彼の見えない顔に祝福あれ！」（二六〇）――ここもクレアとアレックの関係を（さらには『テス』全体を）ヤヌスの神話のコンテクストにおいてとらえ直すよう示唆しているところと筆者には思えるが、詳しくは前号を参照。「青鷺荘」については注（11）を参照。

（9）タルボットヘイズの酪農場の主人リチャード・クリックは、週日は「乳搾りのディック」として大きな前かけを着けて酪農業にはげみ、日曜日は「リチャード・クリック氏」としてよそいきの服を着て教会に行く際の、その際だった変身ぶりから「二重人格者（double character）」と言われて、それを歌った「挿韻詩」なるものまでできていたが（八三）、この本名（リチャード）とその愛称（ディック）の使い分けによる同一人物の「二重人格性」の強調はまた、逆にいえば〈リチャード＝ディック〉という二面性を持った人物の同一性の強調でもあり、その点でテスの父親のジョンが、第一章で初めて登場するときは自分で愛称の「ジャック」を名乗っているので、この本名と愛称の〈ジョン＝ジャック〉の同一性とも重なり合っている。この二つの名前による同一性の強調はまた、テスの両親の〈ジョン＝ジョーン〉の双面一体性とも響き

合いながら、巡り巡って〈クレア＝アレック〉のヤヌスとしての同一性もしくは双面一体性の別名としての「二重人格性」を強調することにもなっている。こうしたさまざまな名前の〈二重性〉が、究極的にはテスが〈テス・ダービフィールド〉から〈テス・ダーバヴィル〉へと名前が変わる、『テス』の主題である主人公の自己同一性（アイデンティティ）確立の問題につながっていることは言うまでもない。この点についても本稿第二章を、また次注（10）を参照。なお『テス』における名前の〈二重性〉の問題を指摘したものに次の本がある。Michael Ragussis, *Acts of Naming: The Family Plot in Fiction* (New York & Oxford: Oxford University Press, 1986), 135–161. ちなみに筆者が『テス』における名前の二重性の問題について考えはじめるきっかけになったのもこの本である。

(10) 本稿第一章でも記したように、拙論では、テスの物語の主題を〈テス・ダービフィールド〉から〈テス・ダーバヴィル〉へと変わる、テスのアイデンティティ確立の問題ととらえ、それがプロットの上では「自身（self）」の完成を願うテスと、「身勝手（selfish）」なクレアとアレックとの、「自身（self）」をめぐる関係性の劇として展開されていることから、この「自身（self）」の語を一種のキー・ワードとして使っている。「身勝手（selfish）」については前号注（20）を参照。テスの両親の「身勝手さ（selfishness）」については本文で指摘したとおりだが、この〈ジョン＝ジョーン〉というヤヌスが、その後登場する真打ちともいうべき〈クレア＝アレック〉の出現を準備するためのいわば前座であることは、先に第一章で指摘したとおり。

(11) 注（4）でも指摘したように、テスの物語の背景に、「神々の司」によるプロメテウス捕縛からはじまる一連のローマ建国伝説を置いてみると、最後ではルクレティアの凌辱事件が重要な意味をもってくると思われるが、そのルクレティアの物語のテクストにはシェイクスピアの『ルークリースの凌辱』が使われている。テスが直接ルクレティアにたとえられている箇所（二九一）はべつとしても、アレックに誘惑されてレイプされたテスが得た教訓――「美しい小鳥がさえずるところにも蛇がシューシュー音をたてている」（五八）は、そのシェイクスピアからの引用であるからで（八七一行）、同様に「青鷺荘」でテスがクレアに言った「遅すぎた」という台詞も、レイプされたルクレティア／ルークリースがようやく戦地のアルデアから帰還してきた夫に言った同じ「遅すぎた」（一六八六行）からの引用と考えられることは、前号で指摘したとおり。またこの「アルデア」という地名は、オウィディウスの『転身物語』によれば「青鷺（heron）」の意であるから（第一四巻五七八―八〇行）、この「青鷺荘（The Herons）」における「遅すぎた」というテスの台詞からも、テスのレイプをルクレティアのそれに重ね合わせ、さらにテスの物語全体をローマ建国伝説のコンテクストにおいてとらえ直すように求める示唆が読み取れるだろう。なお、マイケル・ミルゲイトはこの「遅すぎた」の台詞にシェリーの「エピサイキディオン」からのエコーを聞いているが、そのことも前号の注（12）で触れたとおり。

(12) 「わたしはなんてひどく狂ったみたいなことをしてしまったのかしら。でも前は、蝿一匹だって虫けらだって傷つけるのには我慢できなかったのに・・・」（三〇八）と言っているところには、テスのアレック殺害への罪の意識が多少は見られるのかもしれないが、それ以上に、構造的にそうせざるをえなかった必然性の方が強く感じられる。

(13) テスは、新婚初夜の告白によるクレアとの気まずい口論の後でさえも、ダーバヴィル家の先祖の婚姻の間で一人で寝て「安息の眠り（repose）」を得ていたので（一八三―八四）、このストーンヘンジで異教徒（ペイガン）としての先祖と一体化して眠ったときも、直前にクレア

がテスの最後の質問にも答えられないという気まずいことがあったにせよ――というよりむしろ、前回と同様に〈気まずい〉ことがあったが故に、それも「安息の眠り」であったと考えられよう。

(14) たとえば本稿がテクストとして使っているノートン版第3版（注［2］参照）の脚注によれば、この「ソロー（Sorrow）」の名前の典拠は、「創世記」第三五章一八節の、ヤコブの妻ラケルが、みずからの死と引き換えに生んだ「ベノニ（Ben-oni）」（「悲しみの子（son of sorrow）」の意）にあるという（七四）。しかし、このベノニという名前の意味は聖書の注釈書に書かれている説明であって、「創世記」のテクストにそのような記述があるわけではない。本文でも指摘したように、当時ひろく流布していた聖書はおそらく欽定訳だろうし、クレア師が読んでいたのもそれで、テスが読んでいたのもおそらく同様だろうが、どんなヴァージョンであれ、『「創世記」の中のある句』が、聖書のテクスト以外の注釈部分を指すと考えるのには無理がある。母親の命と引き換えに生まれた子が「悲しみの子」の意の名がつけられるのはさほど珍しくはなく、トリスタン伝説にも先例があるが、『テス』の場合は、死ぬのは母親ではなく子供の方である。テスのソローは、アレックの誘惑もしくはレイプの結果生まれた子であるのだから、ここでは本文でも引いたように、蛇の「誘惑」にのったイヴに対する神の罰として、男が女を一方的に「支配」し、女は「苦しみ（sorrow）」のなかで子供を産むことが述べられているくだりこそが想起されるべきだろう。

(15) この頭にかぶる「権威のしるし」とは、具体的には帽子やヴェールで、当時の教会での一般的な風習を表したもののようだが、この一節からはやはり、フリントコム＝アッシュに現れたアレックが暗にパウロを引き合いに出しながら、テスのかぶっていた「帽子」に言及している次の箇所を想起せざるをえない。「『その布を垂らした帽子（wing-bonnet）――君たち畑で働く娘たちは、危険にさらされたくなければそんな帽子はかぶっちゃいけないよ。』・・・皮肉な笑いを浮かべながらつづけた。『あの独身の使徒（＝パウロ）だってそんなきれいな顔を見たらきっと誘惑されていただろうよ・・・。』」（二五九）ここにはアレックの、その名は知らされてないながらもテスの夫エンジェル・クレアの「権威」を剥ぎとり、自分がそれにとってかわろうとする姿が、またクレアもアレックもともに「女」の上に立つ「かしら」の「男」として描かれているのが、パウロの言説を背景に読みとれるだろう。なお以下のパウロについての記述に関しては、カール＝ハインツ・マレ『はじめに女がいた――古典のヒロインたち』（小川真一訳、悠思社、一九九三）を参照。

(16) クレアがイズと分かれた直後、次のように記されている。「クレアもまた［イズと同様に］、その娘に別れを告げてから、胸は痛み、唇は震えていた。しかし彼の悲しみは、イズのためではなかった。」（二一三）クレアの「悲しみ」はこの期におよんでもなおテスとの別離のためのもので、どれほどイズの心を弄んで泣かせても、ほとんどまったく痛痒を感じてはいないことが明記されている。前号注（25）参照。

(17) ここで、ルクレティアが、夫の戦場からの帰還を待つあいだに、トロイア陥落の様子を描いた「壁かけの絵」を見ながら、トロイアの滅亡と、レイプによる自分自身の破滅とを重ね合わせているところ（『ルークリースの凌辱』一三六六―一五七五行）に、先のダーバヴィル家の先祖の女たちの「復讐の意図」がこもった「肖像画」とを、さらに重ね合わせてみることができるだろう。シェイクスピアによれば、パリスによる「ヘレネ凌辱」（一三六九行）に対するギリシアの復讐がトロイアを滅ぼし、同様にタルクィニウスによるルクレティア凌辱に対する夫たちの復讐がローマの王制を滅ぼしているので、この〈私〉のレイプに対する復讐が国や政治体制といった〈公〉の滅亡や革命に至る点で両者は重なり合っているし、同様にテスの〈私〉のレイプに対する復讐は、〈女全体〉の〈男全体〉に対する復讐や異議申し立てという

〈公〉のそれになっているので、その点で二つの先例と重なり合うからである。（ルクレティアについては本稿序章［前号］および注［11］を参照。）

(18) エンジェル・クレアが堕天使ルシフェルのイメージをになっていることについては、第一九章にそれとおぼしい箇所がある。すなわち、エデンの園のようなタルボットヘイズでテスが、クレアの奏でるハープの音に耳を傾けていると、引きつけられてその場を立ち去ることができなくなり、「立ち去るどころか」さらにクレアの方に引き寄せられて近づいてゆくと、そこには「りんごの木」がはえていたとある（九六）。「ハープ」は象徴的には天上で天使が奏でる楽器なので（Vries［次注参照］）、その意味でエンジェルはたしかにその名のとおり〈天使〉なのだが、そのハープの音色がテスを誘った先には「りんごの木」がはえていたとあるからには、やはりこの「天使」は、一度は地獄に落とされながらも天上に舞い戻って蛇に変装し、たくみにイヴを誘惑して禁断の木（りんご）の方へ連れて行った堕天使ルシフェル／サタンに他なるまい。この直前の第一八章では、さりげなくこの『失楽園』を予告するかのように、トマス・グレイの『哀歌』から「沈黙せるミルトン」という一節が引用されていた（九三）。このようにクレアが堕天使ルシフェル／サタンであるなら、同様に――というよりこれはもう『失楽園』のパロディと言うべきだが――「野良着」を着て農夫に〈変装〉したアレックがテスに近づいて、蛇に変装したルシフェル／サタンがイヴを禁断の木へと誘う『失楽園』の一節を暗唱してみせる場面のあったことが（二七四－七五）、あらためて思い出されてくるだろう（本稿序章参照）。――そうするとここにもまた、〈ルシフェル／サタン〉という一つの体の上に、〈クレア〉と〈アレック〉という違う二つの顔が乗っている、双面一体のヤヌスの姿が見えてくるだろう。

(19) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, 2nd, revised ed., (Amsterdam & London: North-Holland Publishing, 1976), 'harp' の項による。

(20) Gertrude Jobes, *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols* (New York: Scarecrow Press, 1962), 'Stonehenge' の項による。

(21) このように自分の魂のありようやアイデンティティに無自覚なクレアも、〈無意識〉の領域では、テスに導かれてその魂の救済を求めていたことは、次に引くクレアの「夢遊状態」の記述ですでに指摘されていた。「彼の夢は・・・新しい局面に入ったかのようで、そこでは彼は、彼女が霊（spirit）としてよみがえり、自分を天国へ導いてくれるものと想像していた。」（一九六）

(22) 本稿序章でも記したように、アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』の末尾近くで登場するヘルメスは、いつか〈身代わり〉が現れてプロメテウスが救われる可能性をほのめかしているが（一〇二〇－二九行）、アポロドーロスの『ギリシア神話』では、ヘラクレスがケンタウロス族のケイロンをその〈身代わり〉に差し出したと記されている（第二巻五章四および一一節、高津春繁訳、岩波文庫、一九五三）。そのケイロンによる〈身代わり〉がプロメテウスの〈救済〉になったことについては、カール・ケレーニイ『プロメテウス』第一一章を参照（辻村誠三訳、法政大学出版局、一九七二、一九三－二一八頁）。